

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月12日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520490

研究課題名（和文） 多重構造仮説に基づく新しい統語的段階性の開拓

研究課題名（英文） New Development of Syntactic Gradability Based on Syntactic Multiple Structure Hypothesis

研究代表者

牛江 一裕（USHIE KAZUHIRO）

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：10134420

研究成果の概要（和文）：受動化における従来の統語的観点を中心的な条件とした分析に対しての批判を行い、受動化についてもつばら動詞が取る統語構造にのみに拠るのではなく、おもに動詞の項構造により受動化の可否を説明する代替案を提案した。文法事項の配列については「基本的なものから発展的で高度なものへと順次配列する」という原則を立てた場合、教材配列について現行の中学校英語検定教科書にはさまざまな問題点が存在することを指摘し、改善の方向性を示唆した。

研究成果の概要（英文）：I criticized the traditional syntactic analysis held in generative grammar for decades and showed that the relevance of syntax to passivization is more restricted than have been thought, noting that they rather suggest that the semantic aspect of verbs is more relevant to passivization. I proposed an alternative way to explain passivization focusing mainly on argument structure of verbs rather than exclusively on the syntactic structure that a verb takes. I also examined some of the current government-approved English textbooks used in junior high schools, and pointed out several problems concerning grammatical descriptions and vocabulary from the viewpoint that the presentation order of educational materials should be from basic to advanced.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、英語学

キーワード：文法

1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの統語論研究においても平行的な2重構造を持つという考え方が部分的・散

発的には提案されてきている。Goodall(1987)によって導入された平行構造はその後一定の発展を見せてはいるが、その妥当性と有用

性が十分に検証されているとはいえない。Pesetsky(1995)においても Layered Syntax と Cascade Syntax という2種類の構造が仮定されている。それらは本研究での多重的な構造とはかなり性質の異なるものであり、とくに同時平行的に存在する構造が相互に作用すると仮定するかどうかという点で根本的に異なる。本研究での統語的多重構造とは、文がその統語表示として(派生の段階・レベルとしてではなく)複数の構造を同時平行的に持ち、それらの構造が相互に影響を及ぼしあうという仮説である。この意味における多重構造もある面では Goodall や Pesetsky の平行構造と共通した部分があるが、ひとつの統語現象においてはいずれかの構造のみが関与すると考える彼らの2重構造とは大きく異なる。

(2) 研究代表者は Ushie (1994) において Syntactic Dual Structures という考え方を提案して以来、さまざまな構文において多重構造的な性質が見られることを指摘し、それらの性質を導くような多重構造の関係とはどのようなものか探求してきた。そして Kajita (1977)から始まる動的文法理論の影響も受けて、その多重性の原因は言語習得過程において起こることが深く関与しているという見通しを持ち、具体的な構文での発現を牛江(2007)において部分的に指摘した。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、言語の統語現象のさまざまな場所で見られる段階性・ファジーな性質について、統語構造として平行的な多重構造を仮定することにより、これまで考えられていなかった新しい種類の段階性を開拓し、理論化することにあつた。ここでの構造的な多重性とは、派生の段階・レベルとしてではなく、文がその統語構造として複数の構造を同時平行的に持ち、それらの構造が相互に影響を及ぼしあうという仮説である。そのような統語構造の多重性が文法のさまざまな部分で見られるファジー性・段階性とどのように関わっているのかを明らかにするとともに、多重構造が統語論において果たす役割を実証的に示すことを目的とした。

(2) Ross(1973)の Nouniness においてみられるようなディスクリートでない性質は Fanselow et al. (ed.) (2006) などの考察からもわかるように文法のさまざまな部分で観察され、以前から注目されている性質である。本研究では、主に英語を対象としてそのような文法を持つ段階性あるいは不確定性・ファジー性が統語構造の平行的多重性とどのように関係しているのかについて次の点を中心

に実証的に研究を進め、これまで考えられていなかった新しい種類の段階性を開拓しようとした。

1. どのような環境においてどのような種類・性質の段階性・ファジー性が文法、特に統語論において存在するのか。
2. そのような段階性・ファジー性を持つ場合に、どのような多重的な構造が関連している可能性があるのか。
3. 多重的な構造が派生の各段階でどのようにして相互に影響を及ぼしあい、どのようなメカニズムにより段階的・ファジーな性質を生み出しているのか。
4. 多重的な統語構造自体はどのようなメカニズムで派生されるのか。子どもが言語を習得する初期段階で起こったことが、多重構造の発生にどのように関係しているのか。

3. 研究の方法

これまでのさまざまな枠組みでの研究において指摘されてきている統語的段階性をふまえた上で、デジタルコーパス等を十分に活用して実証的に調査した広範囲のデータに基づいて、多重構造仮説を取り入れることにより新しい種類の段階性を開拓した。文法理論のレベルでの考察と言語事実の間を常に行き来することを重視することにより、理論偏重に陥ることなく文法におけるさまざまな段階的性質について新しい観点から分析を進め、その分析を可能とするような理論を構築することをめざした。

- (1) ①伝統文法・生成文法・認知言語学においてこれまでなされてきた研究の中から、特に本研究の目的の対象となる段階性・不確定性を含む統語現象に関する記述を抽出整理し、その理論的・経験的問題点を明確化した。
② ①の基盤となっている統語理論に関する諸研究を検討し、各理論における統語的段階性・不確定性の扱いについての特徴とその問題点を明確化した。
③ これまでの平行構造・ファジー理論に関する研究を検討し、その適用可能性と問題点を明確にした。
④ 言語習得に関する研究のうち、研究課題と関連が深いと考えられるものについて、多重構造の発生原因としての関連性を検討した。

(2) 最近20年間に出版・録画・録音された現代英語の実際の発話資料により、本研究に関連し記述・説明されるべき種々の統語的段階性に関する事実関係を詳細に調査した。それを効率的かつ広範囲に行い信頼性を高めるため、以下のような手順を用いて資料収集を進めた。

① 最近多数作成出版されてきている CD-ROM 版の新聞・文学作品等のテキストデータ類・辞書類を活用する。また、利用可能な市販のコンピュータ用言語コーパスを使用した。映画等のスクリプトで利用可能なものも使用した。

② インターネットにより入手可能なデジタルコーパスを利用した。

(3) 上記(1)および(2)によって得ることの難しい情報(否定的情報・稀な表現についての情報等)について、英語を母語とするインフォマンの協力を得て入手した。

(4) 学会の研究大会等に参加し、研究発表等から最新の動向と資料を入手した。

4. 研究成果

(1) 受動化において θ 役割と格が吸収されるという格と構造に基づく従来の統語的観点を中心的な条件とした分析に対して、概念的小および経験的両観点から批判を行った。これらの手段を用いた GB 理論の枠組みにおける受動化の分析は極小主義の考え方においては保持できないこと、また、抽象格と統語構造に訴えることができない種類の受動化の例があること、および、受動化における統語的条件の果たす役割は従来考えられていたよりかなり制限的であることを指摘し、受動化の条件としては動詞の意味的側面がより強く関わっていることを示唆した。

(2) 具体的には疑似受動化、二重目的語構文、経験者を目的語とする心理動詞、対象動詞などにおいて、格と構造の関与を否定し、動詞の意味的側面が強く関与する例があることを具体的に示し、統語的分析ではその受動化を適切に扱うことができないことを多くの例を挙げて指摘した。

(3) 受動化についてもっばら動詞が取る統語構造にのみに拠るのではなく、おもに動詞の項構造により受動化の可否を説明する代替案を提案した。受動化の操作がレキシコンのレベルで行われると仮定することにより、統語的な違いにかかわらず受動化原理を適用することができること、それにより上述の統語構造に依存するアプローチで問題となるケースについて統一的な説明を与えることができることを示した。その際、いくつかの要因が関係するが、それらの有無のみならず、強弱等の段階性が決定的に関わってくることを明らかにした。

(4) より具体的には、使役項が常に主語として実現されることを考慮し Dowty(1991)の項

選択原理に修正を加えた。受動文の主語は何らかの状態変化を受けなければならないが、経験者目的語使役動詞の受動化から、状態変化が存在するか否かというのではなく、段階性のある概念であり、その強弱が受動化に関係していることが分かった。受動化について語彙的アプローチを採用することにより、統語的アプローチで必要となる再分析や内在格等の恣意的な操作を必要とせず、また統語的構造の違いにかかわらず、受動化をより統一的に説明することができることを明らかにした。

(5) 文法事項の配列については「基本的なものから発展的で高度なものへと順次配列する」という原則を立てることは大方の意見の一致するところであるが、教材配列についてその観点から考えた場合、現行の中学校英語検定教科書にはさまざまな問題点が存在する。それらについて具体的に検討し、改善の方向性を示唆した。統語的段階性は教材配列の順序を考える際に大きな関わりを持ってくるものであり、今後より詳しく検討し教材作成に活かすことが重要である。

(6) 具体的には *Sunshine English Course* の内容を詳しく検討し、接触節、There 構文、比較構文、時制等の文法事項についてその問題点を指摘した。また、定型表現、省略表現、縮約形等、オーラル・コミュニケーション偏重の影響が見られる部分についても問題点の指摘を行った。さらに、語彙および語義についても基本的なものからまず導入し発展的なものに繋げて配列するのが効果的であるが、この点に関しても問題があることを指摘した。

(7) 統語的多重構造と段階性の関連性については現在整理途中であるが、鋭意公表の準備を行っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 牛江一裕、中学校英語教科書における文法記述と語彙導入の問題点、埼玉大学紀要教育学部、査読無、62 巻 2 号、2013、175-190

② YOSHIDA Manabu, USHIE Kazuhiro, *Lexical Passivization (2): An Approach Based on Argument Structure*, 埼玉大学紀要教育学部、査読無、61 巻 2 号、2012、45-72

- ③ YOSHIDA Manabu, USHIE Kazuhiro, Lexical Passivization (1): A Criticism on the Syntactic Analysis of Passivization、埼玉大学紀要教育学部、査読無、60 巻 2 号、2011、105-120

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牛江 一裕 (USHIE KAZUHIRO)

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：10134420

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：